

【原 著】

コロナ禍の2020年度の高学年児童の学級生活満足感と意欲とソーシャルスキル  
—2019年度と2020年度との比較を通して—

河村 茂雄\* 武蔵 由佳\*\* 河村 明和\*\*\*

2020年度の学校教育は、新型コロナウイルスの感染予防のため、他者との直接的なかかわりや協働活動の実施が物理的に制限された状況で展開された。本研究では、そのような状況が小学校高学年の児童にどのような影響を及ぼしたのか、前年度との比較を通して明らかにすることを目的とした。そこで、A市の公立小学校6校の高学年の児童を対象にして、新型コロナウイルス問題発生以前の2019年度と感染症対策が徹底された2020年度に、児童の学級生活満足感と意欲（スクール・モラル）、ソーシャルスキルを調査し、その年度ごとの差を比較検討した。その結果、全体的に、かかわりのスキルが2019年度よりも2020年度に有意に低く、対人関係を形成しようとするのが減少したことが明らかになった。しかし、学年も含め検討を行ったところ、かかわりのスキルにおいて有意に低い結果が確認されたのは4年生だけであり、5年生および6年生は、2019年度と比べてかかわりのスキルが低いものの、有意な差は見られなかった。また、4年生は、承認感、友達関係、かかわりのスキル、学習意欲、学級の雰囲気、2019年度よりも2020年度が有意に低い結果となり、被害感、2020年度が高い結果となった。一方で、5年生および6年生は2019年度にくらべ2020年度が有意に低い因子はなく、学級の雰囲気の得点は2019年度よりも2020年度が有意に高く、6年生では、被害感が2019年度より有意に低い結果となった。かかわりが減少したため、人間関係の軋轢も減少したという形で上昇した面もあると考えられた。特に、4年生には「9歳の壁」という、学力不振がこの頃に目立ち始める教育上の問題が指摘されているが、コロナ禍で授業時間や接触の伴う個別対応などが制限される中で、学習意欲をはじめとして満足感や他の意欲が低下した可能性が推測された。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、対人関係、高学年、学級生活満足感、学校生活意欲、ソーシャルスキル

【問題と目的】

2017年版学習指導要領における答申（中央教育審議会、2016）が発表されてから準備されてきた「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメントの充実」「主体的・対話的で深い学びによる授業改善」を謳った新学習指導要領が、2020年度に小学校から全面実施された。特に、「主体的・対話的で深い学びによる授業改善」では、学習者が協働活動の中に主体

的に参加し、その中で新たな状況下に応じた最適解を、自らも知識や技術を更新し、他者と協働して生み出している。しかし、新型コロナウイルス感染症の世界的流行（パンデミック）が発生し、2020年2月頃に日本にも広がった。そして、その感染拡大を防ぐために、全国すべての小中高校と特別支援学校の全国一斉の休校措置が2020年3月初旬から始まり、長いところでは5月末までの約3か月間にも及んだ。その間は外出自粛も要請され、児童生徒の行動も大きく制限された。全国一斉の休校措置の時期は例年であれば、学年の教育活動のまとめである学年末から、新たなクラス、新たな担任での新学年スタートの時期である。

\* 早稲田大学教育・総合科学学術院

\*\* 都留文科大学

\*\*\* 東京福祉大学

このような状況の中で、新学習指導要領のスタートもある程度の混乱に陥ったと考えられるのである。

学校再開後も児童たちはマスクの着用を徹底し、3つの密（密閉・密集・密接）を避ける、定期的に消毒するなど、基本的な感染症対策の徹底を前提にして学校教育活動は再開された。例えば、教室の座席は大きく離され、学校再開当初は学級の規模に応じ、学級を2または3の小グループに分け、異なる教室や時間で指導が行われた。密閉状態の教室での音楽科の歌唱指導や、家庭科における調理実習、体育科における児童生徒が密集する運動や近距離で接触したりする運動、児童生徒が密集して長時間活動するグループ学習など、リスクの高い学習活動を行わないなどの感染拡大防止対策をとることが徹底された。かつ、運動会や文化祭、学習発表会など児童生徒が密集して長時間活動する学校行事は控えられたのである。つまり、新学習指導要領で推奨されている協働の視点での教育活動はかなり縮小され、集団活動を通した体験学習をする環境が制限されてしまっている。学校行事などを通してリーダーシップ能力などを獲得することが期待される時期の高学年の児童は、具体的に体験学習をする機会が大きく減少してしまったのである。

高学年の4～6年生の児童の発達の形成上には、まず「9歳の壁」がある。文部科学省（2009）も、9歳以降の小学校高学年の時期には、知的な活動においてもより分化した追求が可能となり、自分のことも客観的にとらえられるようになる一方、発達の個人差も顕著になることを指摘している。この時期のハードルが「9歳の壁」である。そして、思春期に入る時期でもある。河村（2010）は、思春期には、第二次的徴が現れる身体的変化、自分や家族を客観的・論理的に見ることができるようになる心理的变化がある。また、心身両面の急激な変化にさらされ、不安定になりやすく、自分を特殊視し、一人悩むことも多くなる。特に、この時期は自我のめざめから、親や教師という権威に反抗する（第二反抗期と呼ばれる）ことを通して自分を見つめ、価値観や生き方を確立していく過程をとるので、大人に相談することも少なくなる。このような中で、友達との交流の中で秘密や悩みを共有し合うこ

とにより、それらの葛藤や悩みを持ちつつ生きていくことを自己受容できるようになってくるので、思春期の子どもには友達との交流がとても重要であるとしている。身体も大きく成長し、自己肯定感を持ち始めるが、反面、発達の個人差も大きく見られ、自己に対する肯定的な意識を持たず、劣等感を持ちやすくなる時期でもある。現在の我が国における小学校高学年の時期における子育ての課題として、インターネット等を通じた擬似的・間接的な体験が増加する反面、人やもの、自然に直接触れるという体験活動の機会の減少が指摘されている。そして、小学校高学年の時期に重視すべき課題として、他者との直接的交流体験に基づく、他者視点取得や自尊尊重意識や思いやりの涵養、集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成があげられている（文部科学省、2009）。つまり、高学年の時期の発達課題は、集団活動を通した体験学習が不可欠であるが、それがコロナ禍で不十分になり、達成への影響が危惧されるのである。

2020年度に小学校から全面实施された新学習指導要領は、現代の子どもたちの発達の課題を踏まえて、より積極的に資質・能力の育成を目指すものである。しかし、授業改善を含む学校教育活動は、対人接触が制限される新型コロナウイルスの感染症対策の徹底を前提にして展開されている。新型コロナウイルスの感染予防のための取り組みは2021年度も継続されることが想定されるのである。そこで本研究では、関東圏のA市の公立小学校6校において、コロナ禍前後の2019年度と2020年度の高学年4～6年生の児童を対象に、児童の学級生活満足感と意欲（スクール・モラル）、ソーシャルスキルを調査し、他者との直接的なかわりや協働活動の展開が物理的に難しくなった2020年度と2019年度を比較検討し、その差から児童の資質・能力の育成を重視した学校教育への影響を推察することを目的とした。

## 【方法】

### 1 調査時期

2019年9～11月および2020年9～11月に実施

した。

## 2 調査対象

A市の公立小学校6校の児童4～6年生を対象とした。2019年度は、1,670名（男子877名、女子793名）を対象とした。内訳は、4年生540名（男子282名、女子258名）、5年生576名（男子306名、女子270名）、6年生554名（男子289名、女子265名）であった。2020年度は1,655名（男子858名、女子797名）を対象とした。内訳は、4年生542名（男子273名、女子269名）、5年生541名（男子281名、女子260名）、6年生572名（男子304名、女子268名）であった。

有効回答は、2019年度は、1,657名（男子869名、女子788名）であった（有効回答率99.22%）。2020年度は1,634名（男子842名、女子792名）であった（有効回答率98.73%）。

## 3 測定用具

児童の学級生活における満足度や意欲（スクール・モラル）を測定するための標準化された尺度であるhyper-QU小学校4～6年用（河村、2006）より下記の尺度を実施した。

### (1) 学級満足度尺度

承認感と被侵害感の計12項目（各6項目）から構成されている。評定は「1：まったくそう思わない」から「4：とてもそう思う」までの4件法で、単純加算により得点を算出する。下位尺度の全国平均値を基準に、「承認感」と「被侵害・不適応感」の各得点の交点によって、学級生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学級生活不満足群の4つの群に分類することで、児童の学級適応状態を理解することが可能である。

### (2) 学校生活意欲尺度

児童が学校生活のどの領域で意欲を感じているかを問うものである。「友達関係」、「学習意欲」、「学級の雰囲気」の計9項目（各3項目）から構成されている。評定は「1：まったくそう思わない」から「4：とてもそう思う」までの4件法で、単純加算により得点を算出する。

### (3) ソーシャルスキル尺度

学校生活で必要とされるソーシャルスキルの活用程度について問うものである。小学校高学年（4～6年生）は2因子構造で「配慮のスキル」（8項目）と「かかわりのスキル」（8項目）の計16項目から構成されている。評定は「1：まったくそう思わない」から「4：とてもそう思う」までの4件法で、単純加算により得点を算出する。

## 4 調査手続き

調査校を管轄するA市の教育委員会と著者所属大学との間で今回の調査の契約を締結し、各学校の全校長に研究目的と調査の内容を説明し、全学校に対して依頼後2ヶ月以内に調査の実施を求めた。調査研究の内容については、著者所属大学の倫理委員会の審査を受け承認を得ている。そして、各学校長、学年主任、学級担任に承諾を得た上でホームルーム時に集団方式で実施した。調査の実施においては担任教師より児童に、学校成績に一切関係がないこと、回答は強制ではなく、回答しなくても不利益を被らないこと、回答後の調査用紙は担任教師やクラスメイトに見られることはないこと、個人のプライバシーは守られることが伝えられた。また上記内容についてはフェイスシートにも明記した。さらに担任教師には、実施の手順・注意事項のプリントの通りに実施することを依頼し、児童の回答用紙は配布した封筒に入れ、その場で密封してもらい、児童に余計な不安がかからないように配慮した。

## 【結果】

### 1 全体傾向

(1) 2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル尺度得点の比較  
2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル尺度得点の比較をするために、*t*検定を行った（Table 1）。その結果、高学年においてはかかわりのスキルが2019年度よりも2020年度が有意に低かった（*t*=3.37, *p*<.001）。

(2) 2019年度と2020年度の学級満足度4群の出現率  
学級満足度4群の出現率に違いが見られるのかを検討するために、2019年度、2020年度の出現人数に、 $\chi^2$ 検定を行った (Table 2)。その結果、高学年においては有意な偏りは認められなかった。

## 2 学年別の傾向

(1) 2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル尺度得点の比較  
高学年における学年別の2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル尺度得点の比較をするために、学年(3)×年度(2)の2要因分散分析およびBonferroni法による多重比較を行った (Table 3)。その結果、すべての因子に交互作用が確認された。承認感では、4年生において

2020年度より2019年度が有意に高かった。また、2019年度において、6年生より4年生の承認感が高く、2020年度では、4年生より5年生および6年生の承認感が高かった ( $F=16.36, p<.001$ )。被侵害感では、学年の主効果が有意で、5、6年生と比べて、4年生が高かった ( $F=7.21, p<.001$ )。さらに交互作用も有意で、4年生においては、2019年度より2020年度の被侵害感が高く、6年生においては、2020年度より2019年度の被侵害感が高い結果となった。また、2020年度において、5年生および6年生より4年生の被侵害感が高い結果となった ( $F=6.22, p<.01$ )。友人との関係の交互作用では、4年生において、2020年度より2019年度が高かった。また、2020年度において、4年生より、5年生および6年生の友達関係

**Table 1** 2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル尺度得点の比較

	2019年度 ( $n = 1,657$ )		2020年度 ( $n = 1,634$ )		<i>t</i> 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
承認得点	20.23	3.32	20.03	3.40	1.80†	
被侵害得点	8.49	3.09	8.40	3.06	0.87 <i>n.s.</i>	
友達関係	10.77	1.43	10.70	1.43	1.35 <i>n.s.</i>	
学習意欲	9.86	1.72	9.82	1.75	0.67 <i>n.s.</i>	
学級の雰囲気	10.65	1.66	10.67	1.68	0.37 <i>n.s.</i>	
配慮のスキル	29.51	3.05	29.55	2.97	0.48 <i>n.s.</i>	
かかわりのスキル	26.29	4.69	25.72	4.92	3.37***	2020<2019

† :  $p<.10$ , \*\*\* :  $p<.001$

**Table 2** 2019年度と2020年度の学級満足度4群のクロス表

		年度	
		2019	2020
学級生活満足群	人数	1,144	1,108
	%	34.8	33.67
	Adj.	0.76 <i>n.s.</i>	-0.76 <i>n.s.</i>
非承認群	人数	253	290
	%	7.68	8.81
	Adj.	-1.92 <i>n.s.</i>	1.92 <i>n.s.</i>
侵害行為認知群	人数	88	77
	%	2.67	2.34
	Adj.	0.79 <i>n.s.</i>	-0.79 <i>n.s.</i>
学級生活不満足群	人数	172	159
	%	5.22	4.83
	Adj.	0.62 <i>n.s.</i>	-0.62 <i>n.s.</i>

**Table 3** 学年別の2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル尺度得点の比較

年度 学年	2019			2020			主効果			交互作用	
	4年生 (n = 538)	5年生 (n = 570)	6年生 (n = 549)	4年生 (n = 538)	5年生 (n = 529)	6年生 (n = 567)	年度 F値	学年 F値	F値		
承認感	20.56 (3.30)	20.10 (3.28)	20.06 (3.35)	19.40 (3.67)	20.28 (3.34)	20.38 (3.10)	3.52†	1.65 <i>n.s.</i>	16.36***	4年生 2020<2019 2019 6<4 2020 4<5,6	
被侵害感	8.53 (3.15)	8.43 (2.94)	8.52 (3.18)	8.94 (3.48)	8.28 (3.03)	8.01 (2.55)	0.68 <i>n.s.</i>	7.21***	6.22**	4年生 2019<2020 : 6年生 2020<2019 2020 5, 6<4	
友達関係	10.80 (1.45)	10.76 (1.39)	10.74 (1.45)	10.52 (1.56)	10.76 (1.39)	10.81 (1.33)	1.94 <i>n.s.</i>	1.94 <i>n.s.</i>	4.50*	4年生 2020<2019 2020 4<5, 6	
学習意欲	10.20 (1.65)	9.78 (1.69)	9.62 (1.78)	9.87 (1.80)	9.88 (1.70)	9.71 (1.74)	0.47 <i>n.s.</i>	12.86***	5.37*	4年生 2020<2019 2019 5, 6<4	
学級の雰囲気	10.81 (1.54)	10.59 (1.68)	10.53 (1.73)	10.41 (1.97)	10.84 (1.49)	10.75 (1.52)	0.11 <i>n.s.</i>	1.19 <i>n.s.</i>	13.26***	4年生 2020<2019 : 5年生および6年生 2019<2020 2019 6<4	
配慮のスキル	29.63 (3.07)	29.44 (3.18)	29.44 (2.88)	29.35 (2.93)	29.79 (2.78)	29.53 (3.15)	0.23 <i>n.s.</i>	0.70 <i>n.s.</i>	3.04*	2020 4<5	
かかわりの スキル	26.67 (4.77)	26.05 (4.74)	26.17 (4.54)	25.09 (5.09)	26.00 (4.85)	26.08 (4.76)	11.86***	0.74 <i>n.s.</i>	8.92***	4年生 2020<2019 2020 4<5, 6	

上段：平均値 下段：標準偏差 \* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$

が高かった ( $F=4.50$ ,  $p < .05$ )。学習意欲は学年の主効果が有意で、5年生および6年生より4年生が高い結果となった ( $F=12.86$ ,  $p < .001$ )。また、交互作用も有意で、4年生においては、2020年度より2019年度が高かった。また、2019年度において、5年生および6年生より4年生の学習意欲が高い結果となった ( $F=5.37$ ,  $p < .05$ )。学級の雰囲気は交互作用が有意で、4年生において、2020年度より2019年度が高く、5年生および6年生においては2019年度より2020年度が高い結果であった。また、2019年度において、6年生より4年生が高い結果となった ( $F=13.26$ ,  $p < .001$ )。配慮のスキルの交互作用では、2020年度において、4年生より5年生が高い結果となった ( $F=3.04$ ,  $p < .05$ )。かかわりのスキルでは年度の主効果が有意で、2020年度より2019年度が高かった ( $F=11.86$ ,  $p < .001$ )。また、交互作用も有意で、4年生において、2020年度より2019年度が高い結果となった。そして、2020年度において、4年生より5年生および6年生のかかわりのスキルが高い結果となった ( $F=8.92$ ,  $p < .001$ )。

## (2) 学年別の2019年度と2020年度の学級満足度4群の出現率

高学年において、学級満足度4群の出現率に違いがみられるのかを検討するために、学年別の2019年度、2020年度の出現人数に、 $\chi^2$ 検定を行った (Table 4)。結果、2019年度においては、4年生の非承認群の出現率が低く、侵害行為認知群の出現率が高かった。2020年度においては、4年生の学級生活満足群の出現率が低く、学級生活不満足群の出現率が高かった。5年生は学級生活満足群の出現率が高かった。6年生は、学級生活満足群の出現率が高く、学級生活不満足群の出現率が低かった。このことから、2020年度において、4年生が5、6年生と比較し学級生活満足群の出現率が低いこと、学級生活不満足群の出現率が高いことが明らかになった。



Table 4 2019年度と2020年度の学級満足度4群のクロス表

		2019年度			2020年度		
		4年生	5年生	6年生	4年生	5年生	6年生
学級生活満足群	人数	386	387	371	▼324	△378	△406
	%	23.3	23.36	22.4	19.83	23.13	24.85
	Adj.	1.65 <i>n.s.</i>	-0.73 <i>n.s.</i>	-0.91 <i>n.s.</i>	-4.60***	2.18*	2.39*
非承認群	人数	▼66	98	89	109	84	97
	%	3.98	5.91	5.37	6.67	5.14	5.94
	Adj.	-2.35*	1.58 <i>n.s.</i>	0.75 <i>n.s.</i>	1.86 <i>n.s.</i>	-1.37 <i>n.s.</i>	-0.49 <i>n.s.</i>
侵害行為認知群	人数	△40	26	22	33	21	23
	%	2.41	1.57	1.33	2.02	1.29	1.41
	Adj.	2.67**	-0.99 <i>n.s.</i>	-1.67 <i>n.s.</i>	1.90 <i>n.s.</i>	-0.98 <i>n.s.</i>	-0.91 <i>n.s.</i>
学級生活不満足群	人数	46	59	67	△72	46	▼41
	%	2.78	3.56	4.04	4.41	2.82	2.51
	Adj.	-1.69 <i>n.s.</i>	-0.03 <i>n.s.</i>	1.71 <i>n.s.</i>	3.49***	-0.98 <i>n.s.</i>	-2.49*

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$  △: 有意に高い, ▼: 有意に低い

### 【考察】

本研究の目的は、新型コロナウイルスの感染予防のため、他者との直接的なかかわりや協働活動の展開が物理的に制限された2020年度の学校現場の状況が、思春期に入る時期の小学校高学年の児童にどのような影響を及ぼしたのかを、前年度との比較を通して明らかにすることであった。この目的を達成するために、A市の公立小学校6校の児童を対象にして、新型コロナウイルス問題発生以前の2019年の9～11月と感染症対策が徹底された2020年の9～11月に、児童の学級生活満足感と意欲（スクール・モラル）を調査し、その年代差を比較検討した。その結果、全体としてかかわりのスキルが2019年度よりも2020年度において有意に低かった。ただし、学年も含め検討を行ったところ、かかわりのスキルにおいて有意に低い結果が確認されたのは、4年生だけであり、5年生および6年生は、2019年度と比べてかかわりのスキルが低いものの、有意な差は見られなかった。河村（2006）が作成した小学生高学年用の学級生活で必要とされるソーシャルスキル尺度は、能動的に友達とかかわろうとする際に必要な「かかわりのスキル」と対人関係のマナーや相手への気遣いを表す「配慮のスキル」の2因子で構成されている。そして、配慮のス

キルおよびかかわりのスキルが共に活用量が増えていれば対人関係面で問題はないであろうが、配慮のスキルの使用が減少しているのであれば、それは対人関係のマナーが低下し、相手への気遣いがなされなくなることを意味する。一方で、かかわりのスキルの使用量が減少するのであれば、それは自ら対人関係を形成しようとするのが乏しくなることを意味する（河村・品田・藤村、2007）。したがってこの結果は、4学年の児童たちはコロナ禍の状況で、他者とのかかわりが減少し、対人関係を形成しようとするのが少なかったことが明らかになった。

このような中で、5年生および6年生においては、学級の雰囲気は2019年度よりも2020年度に有意に高かった。6年生は、学級生活満足群の出現率が有意に高く、学級生活不満足群の出現率が低かった。これは、被侵害感が6年生において2019年度よりも2020年度に有意に低かったこと、5年生は6年生と有意な差が認められないことを併せて考えると、対人関係が活性化して充実感が高まったのではなく、全体のかかわりが減少した中で人間関係の軋轢も減少し、被侵害感が低下したので、学級の雰囲気や満足感が上昇した面もあると考えられた。つまり、この結果は一見、好ましいように見えるが、かかわりの低下が学級の雰囲気や満足感の上昇という形で強化されると、さ

らに対人交流が低調になる可能性が考えられ、児童の協働性の高まりにつながっていくとは考えられず、教育的には問題があると考えられる。

それに対して4年生は、承認感、友達関係、かかわりのスキル、学習意欲、学級の雰囲気は2019年度よりも2020年度が有意に低く、学級生活満足群の出現率が低く、学級生活不満足群の出現率が高かった。ほとんどの指標で、新型コロナウイルス問題発生以前の2019年度よりも感染症対策が徹底された2020年度が低かった。特に、授業改善が標榜されている中で学習意欲の低さには注目したい。4年生には「9歳の壁」という、学力不振やカリキュラムの速度についていくことのできない子どもがこの頃に目立ち始める発達・教育上の問題が指摘されている（森永，2019）。この時期の子どもは、ピアジェの「認知発達段階理論」から考えると具体的思考から抽象的思考への移行期にあたり、それに合わせて学習内容も変化していく。例えば、森永（2019）は、算数科では、小数のかけ算や割り算の計算をすることが求められる、小数は整数と異なり一つの数として具体的に数えられるものではなく、抽象的思考が必要となることを指摘している。さらに森永（2019）は、理科では、3年生では植物の成長や虫の体のつくりの観察など、目に見えたり触れて感じたりすることのできるものを扱った内容であった。だが、4年生からは電気や磁石などの目に見えないものを扱う内容を学ぶようになり、実験の結果を表にまとめて整理して共通点を見つけたりするなど、抽象的な思考が求められるのである。この変化によって理解することに困難さを抱え、つまずきを感じる子どもたちが増えていくことを指摘している（森永，2019）。コロナ禍で、学習時間が減少し、かつ、感染症対策で教員からの個別対応も制限される中で、理解が不十分になる子どもが増え、学習意欲が低下したことが推測されるのである。さらに、協働的な活動や学びが標榜されている中で友達関係にも注目したい。4年生は「ギャングエイジ」と呼ばれてきた時期である。10歳前後から親への心理的依存はそのままであるが、親子関係は徐々に離脱傾向を示し、友人との関係を大事にするようになる。遊びでも友人の間で秘密を共有し、

強い我々意識を持って行動する。それがときに反社会的な行動となって表れることから「ギャングエイジ」と呼ばれたのである（河村，2010）。このような時期に、新型コロナウイルスの感染予防のため、教室での3密回避や接触する運動の制限、グループ活動の制限、給食での黙食など、友人とのかかわりを制限されたことは、友人関係の形成意欲にマイナスの影響を与えたことが想定されるのである。言及した学習意欲と友達関係の低下には、承認感、かかわりのスキル、学級の雰囲気の低下が間接的に影響していると考えられる。

以上、2020年9～11月時点で、すでに小学校高学年の児童に、新型コロナウイルスの感染予防のため、他者との直接的なかわりや協働活動の展開が物理的に制限された影響が、少なからず生起していることが推測された。その影響は高学年すべてに均等に生起するのではなく、発達段階によって、その影響に学年差があることが考えられた。そして、4年生の承認感、友達関係、かかわりのスキル、学習意欲、学級の雰囲気が2019年度よりも2020年度が有意に低かった結果は、2020年度だけの問題ではないと考えられる。適切な対応がなされない場合は、この児童たちが5、6年生になったときもそのマイナスの影響が残る可能性が危惧されるのである。

新型コロナウイルスの感染予防のための取り組みは2021年度も継続していくことが想定される。したがって、他者とのかかわりや協働活動が制限される状況が児童の発達や学習、適応にどのような影響を与えるのかの検討は、継続して縦断的に進めていくことが求められる。なお、本研究は、特定の地域の高学年の児童を取り上げ、定点観測的に探索的な調査研究をしたものであり、緊急時のコロナ禍での本研究結果を、すぐに教育実践に還元することを目指して行われた面がある。今後、複数の地域の児童のデータや年度ごとの比較においても同様の検討を行い、結果の一般化の可能性についても言及していく必要があるだろう。今後の課題としたい。

## 【引用文献】

- 中央教育審議会（2016）. 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
- 河村茂雄（2006）. 学級づくりのためのQ-U入門  
図書文化
- 河村茂雄（2010）. 教育と人間の成長・発達 安彦忠彦・石堂常世（編）最新教育原理（pp.18-30）  
勁草書房
- 河村茂雄・品田笑子・藤村一夫（2007）. 学級ソーシャルスキル 小学校高学年 図書文化
- 文部科学省（2009）. 子どもの徳育に関する懇談会「審議の概要」（案）子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/index.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/index.htm)
- 森永秀典（2019）. 9歳の壁 河村茂雄・武蔵由佳（編）教育心理学の理論と実際（p.60）図書文化
- （2021年8月1日受稿, 2022年1月8日受理）



*Class Life Satisfaction, Motivation, and Social Skills of Upper Grade Elementary School Children During the COVID-19 Pandemic in AY 2020*  
—Through a Comparison of AY 2019 and AY 2020—

*Shigeo Kawamura (Waseda University)*

*Yuka Musashi (Tsuru University)*

*Akikazu Kawamura (Tokyo University of Social Welfare)*

School education in AY 2020 was conducted under conditions that physically restricted direct interaction with others and the implementation of collaborative activities in order to prevent the spread of the novel coronavirus. The purpose of this study was to clarify how such a situation affected children in the upper grades of elementary school through a comparison with the previous academic year. Therefore, in this study we surveyed children's class life satisfaction, their motivation (school morale), and social skills in AY 2019, before the outbreak of the novel coronavirus, and in AY 2020, when infectious disease control measures were thoroughly implemented, and made a comparative examination of the differences between the two academic years. The subjects of the study were children in the upper grades of six public elementary schools in A City. The results showed that, overall, social interaction skills were significantly lower in AY 2020 than in AY 2019 and that attempts to form interpersonal relationships decreased. However, looking at the results by grade, only fourth graders showed significantly lower results in social interaction skills, and while fifth and sixth graders showed lower social interaction skills than in AY 2019, no significant differences were found.

In addition, for fourth graders, results for feelings of approval, relationships with friends, social interaction skills, motivation to learn, and class atmosphere were significantly lower in AY 2020 than in AY 2019, while the results for feelings of infringement were higher in AY 2020. On the other hand, for fifth and sixth graders, there were no factors that were significantly lower in AY 2020 than in AY 2019, scores for class atmosphere were significantly higher in AY 2020 than in AY 2019, and for sixth graders, feelings of infringement were significantly lower than in AY 2019. It is believed that some scores increased due in part to a decrease in conflicts in personal relationships because of the decrease in interactions. The "nine-year-old barrier" in particular has been pointed out as an educational problem for fourth graders, where poor academic performance begins to become noticeable around this time, and it is conjectured that satisfaction and motivations, including the motivation to learn, may have declined as class time and the individual support that accompanies contact were restricted by the COVID-19 pandemic.

Keywords : novel coronavirus infection, interpersonal relationships, upper grades of elementary school, class life satisfaction, school life motivation, social skills